

幼児の言語発達に関する研究

——言語発達遅滞児の予後調査——

研究第5部 望月 武子・丸尾あき子

I 目 的

子どもの言語発達のおくれを訴えて、クリニックを訪れる人は毎年かなりの数に上っている。当研究所の教養相談室に、ことばのおくれを主訴として来所したケースは、昭和43年度は258件、44年度は237件で、全取扱件数の約10%を占めている。この訴えは1才児から6才児までに及んでいるが、年齢別にみれば、2才児では来所者の31%で最も多い問題となっており、3才児では入園問題について二番目に多い問題である。

一般に、言語発達の遅滞について原因として考えられることは、子ども側の要因として、知能発達の遅滞、聴力障害、発語器官の障害、自閉的傾向やその他の情緒的な問題、脳障害などがあり、他に家庭における子どもの

扱い方、言語生活のあり方の問題など、環境的要因をあげることができるが、個々のケースについて、その原因を明確にすることは困難な場合が少なくない。特に、初めて問題を訴えてクリニックを訪れる2～3才の時点では、原因が明らかにならない場合も多く、したがって、その後の指導も積極的、具体的におこなわれていない憾みがある。

そこで、言語発達のおくれを訴えて来所した子どもの予後を調査することによって、その原因を探り、言語発達に障害を及ぼす因子、言語発達を促進させる因子を明らかにして、今後における言語発達遅滞児の診断、指導のための手がかりを得ようとした。

II 方 法

昭和43年4月から45年4月までの期間に、教養相談室で扱った言語発達遅滞を主訴とするケース522例のうち、対象年齢を2～3才児だけに限定して252名に質問紙を送り、その後の言語発達及び日常生活における言語活動の状況を回答してもらった。回答数142名、回収率56.4%である。なお他に病気による死亡者が2名あった。

調査対象になった252名のうち、男子は189名女子は63名であり、言語遅滞を訴えて来所するものの男女の比は3：1になり男子が多くなっている。

来所時に行なった乳幼児精神発達検査によるDQの分布は第1表のようである。検査時の年齢が低いので初回の検査結果だけでは診断ができてくいが、DQ69以下が30%を占めており、知能発達の遅滞が言語発達のおくれの原因となっていると考えられるものがかなり多い。

表に示したように、調査対象者と回答者とのDQの分

第1表 調査対象者及び回答者のDQの分布

DQの段階	調査対象者	回 答 者
テスト不能	42人 16.7%	16人 11.3%
49 以下	19 7.5	12 8.5
50 ～ 59	32 12.7	19 13.4
60 ～ 69	25 9.9	17 11.9
70 ～ 79	43 17.1	27 19.0
80 ～ 89	42 16.7	24 17.0
90 ～ 99	29 11.5	16 11.3
100 ～	20 7.9	11 7.8
計	252 100.0	142 100.0

布状態には大差がないので、特に言語発達のおくれがひどく、問題が深刻なものだけから回答があったというような偏りはみられない。

III 結 果

1. 母親の評定による発達の程度

現在、お子さんのことばの発達は同年の子どもに比べてどう思いますかと母親の印象をきき、5段階に評定して

もらった。これは、母親が子どもの言語の発達をどう受けとめているかということであって、現実の子どもの発達程度とは多少の差があるようではあるが、ことばの問題についての親の心配の程度を示したものと考えることができよう。この場合、かなりおこなれている。ややおこなれているというような程度の差は、母親の性格や、問題意識のあり方によって、その評価がまちまちなところであり、客観性に乏しいので、ふつう以上とおこなれているの二段階にまとめてみても、現在ことばの発達がふつう以上になって心配のなくなっているものは僅かに16名で11%にすぎず、残りの大多数、126名、89%は現在もなおことばの発達におこなれがあり、取り扱いに困っているものや、不安を感じているものである。(第2表)

この母親の評価による言語の発達程度と、言語発達に影響を及ぼすと考えられる事項を、相談来所時のカルテから引き出し関連させてみたのが第3表である。

表にみられるように、かなりおこなれているグループには知能発達の遅滞しているものの割合が多く、したがっ

第3表 言語発達の程度と問題の所存

ことばの発達程度	ふつう以上 N=16	ややおこなれている N=38	かなりおこなれている N=88
DQの平均値	88.6	84.0	66.2
DQ69以下	2 12.5%	5 13.2%	41 46.6%
テスト不能	1 6.3	3 7.9	12 13.6
出産異常 (未熟児)	3 18.8	12 31.9	32 36.5
(仮死)	0	4 10.5	14 15.9
	3 18.8	5 13.2	8 9.1
聴力障害		1 2.6	8 9.1
脳障害		1 2.6	5 5.7
自閉症及びその傾向		1 2.6	19 21.6

てDQの平均値も他のグループに比べ、かなり低くなっている。この他、聴力障害、脳障害、自閉的な傾向などの問題をもつものの割合が多くなっており、未熟児など出産時に異常があったものも多い。

第2表 母親の評定による言語発達の程度

段 階	男	女	計	%
かなり進んでいる		1	1	0.7
やや進んでいる	1		1	0.7
ふ つ う	10	4	14	9.8
ややおこなれている	30	8	38	26.8
かなりおこなれている	64	24	88	62.0

2. 言語の発達状況

母親による日常生活の印象からの評価とは別に、子どもの言語活動を表出言語、理解言語にわけて、お子さんは現在どの程度のことばを話しますかときき、その後の表出言語の発達状況を具体的に、1) 意味をもったことばが1つ2ついえる、2) かなり沢山の単語をいうことができる、3) ことばを2つ重ねて使うことができる、4) ことばを3つ以上重ねて使うことができる、5) 助詞を使って文を話すことができる、6) かなり複

第4表 表出言語の発達状況

段 階	年 齢				計
	2:0~2:11	3:0~3:5	3:6~3:11	4:0~	
ことばが全くでない	3 12.0%	2 5.1	3 11.5	2 3.8	10 7.0
意味をもったことば1つ2つ (1:0~1:6)	6 24.0	9 23.1	1 3.8	4 7.7	20 14.1
かなり沢山の単語 (1:6)	3 12.0	3 7.7	1 3.8	2 3.8	9 6.3
ことばを2つ重ねて使う (1:6~2:0)	5 20.0	8 20.5	7 27.0	6 11.6	26 18.3
ことばを3つ以上重ねて使う (2:0~2:6)	5 20.0	3 7.7	1 3.8	5 9.6	14 9.9
助詞を使って文を話す (2:6)	1 4.0	9 23.1	3 11.5	11 21.2	24 16.9
複雑な文を話す (3:0)	2 8.0	5 12.8	10 38.5	22 42.4	39 27.5
計	25	39	26	52	142

第5表 言語発達段階とDQの平均値

年 齢 段 階	2:0~2:11		3:0~3:5		3:6~3:11		4:0~	
	平均値		平均値		平均値		平均値	
ことばが全くでない	55.0	○38 ○59 ×68	63.5	×51 ○76 △	61.3	○50 59 75	57.0	○38 △76
意味をもったことば1つ2つ	67.0	○不能 52 ○不能 59 ○不能 90	70.9	○不能 58 84 ○不能 59△88 ○37 △80△90	40.0	×40	46.0	○27 42 50 ×65
かなり沢山の単語	88.7	73 87 106	80.5	不能 △76 85	80.0	80	68.0	67 △69
ことばを2つ重ねて使う	80.6	70 86 76 95 76	64.5	×44 69 90 60 70 90 61 72	62.2	39△67○不能 ○50 71 60 86	55.0	35○49 42○52 48 104
ことばを3つ以上重ねて使う	85.7	69 98 72 108 81	78.3	△67 71 97	73.0	73	64.3	不能 65 58 73 61
助詞を使って文を話す	89.0	89	88.6	64 82 97 77 83 111 80 86 115	51.5	○不能 51 52	59.7	○不能 57 62 50 ○58 73 51 59 73 ○53 61
複雑な文を話す	98.5	82 115	83.6	71 97 79 80 90	86.1	54 86 100 ×70 92 101 83 95 84△96	85.0	42 74 84 91 105 69 74 85 94 125 ○71 79 85 97 73 79 88 98 74 83 89 103

雑な文が出来る、の6段階でとらえた。

結果は第4表に示した通りである。この調査では3:0以上の言語能力を有するものについては、その発達の差をとらえることが不可能であるが、その点を考慮しても、ほとんどのものが標準に比べ(表中の()内数字が標準年齢を示す)現在もなお、かなりのおくれをみせており、言語発達の遅滞を訴えてクリニックを訪れるものの予後は概して良好でなく、環境面の配慮では解決できないものが多く、この問題の深刻なことを示している。

3. 言語発達の状況とDQとの関係

現在の言語発達の段階と、相談来所時に行なった乳幼児精神発達検査によるDQの関係をあらわしたものが第5表である。年齢別にそれぞれの言語発達段階のDQの平均値を求めたが、検査時の年齢が低いためDQの信頼性にも問題があるうえに、回答数が充分に得られていないこと、検査後今回の調査までの期間が一様でないことなど、いくつかの問題があるため一律に比較しにくく、明らかな傾向をつかむことはできないが、概して、言語

発達の予後の比較的良好なものにはDQが著しく低いものは少なく、言語発達の予後の悪いものにはDQの低いものが多くなっている。年齢別にみれば、2才段階では言語の発達段階がすすむにしたがいDQの平均値が高くなっており、言語発達段階とDQとはかなり関係がありそうであるが、年齢がすすむにしたがってこの関係は崩れており、複雑な文を話す段階に達しているものの中にDQ42、54、69のものがあり、DQ100以上のものにもなおおくれの著しいものもあるなど、DQが将来の言語発達を予測する指標には必ずしもならないことを示している。

表中の△印は聴力障害、×印はてんかんなど脳波に異常を示しているもの、○印は自閉症及自閉的傾向を有するものの存在を示したものである。これらの点についてはカルテの記録及び今回の調査の回答の中から整理したものであって、すべてのケースについて、これらの問題が充分に究明されているわけではなく、またクリニックによりその診断が一様でない場合も含まれている。したがって言語発達との関係をただちに云々することはできないが、一応の参考にしたものである。これをみると、

ことばの発達に重篤な障害のあるもの、すなわちことばが全くでない段階、及び意味をもったことばが1~2語いえる段階、に止まっているものの中には、これらの問題をもった子どもの割合が多くなっている。そして、この中には「他の人のことばに全く関心がない」「自分の名前も知らないようすで、ことばにぜんぜん興味を示してくれない」「毎日努力しているが少しも変化がない。良い医師や指導法があったら教えてほしい」など父母の切実な悩みを訴える添書がめだっている。

4. 言語発達の状況とテスト内容

テスト内容を分析的に検討することにより言語発達の予後のある程度予測することができるのではないかと考え、言語発達の段階と乳幼児精神発達検査の個々の問題の合格率との関係をみたが、さまざまな要因が混存する

うえに検査時の年令、知能程度によりテストの施行範囲にも差があるので、今回の対象からは予期した結果は得られなかった。

5. 理解言語の発達状況

理解言語の発達状況についての回答を年齢別にまとめたのが第6表である。2才以上の発達をとらえる項目を用意しなかったこと、言語表出能力に関係する項目を入れたことなど、調査項目の選定が適当でなかったため、発達状況をうまくとらえていないが、特にこの面の発達の遅いものには、聴力障害、脳障害、自閉的傾向などの問題の存在が多い。

表出言語と理解言語の発達の関係をあらわしたものが第7表である。

第6表 理解言語の発達

年 齢 段 階	2:0 ~2:11		3:0~3:5		3:6 ~3:11		4:0~		計	聴力障害	脳障害	自閉的傾向
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%				
ことばを理解しない	1	4.0	2	5.1					3	2.1	2	2
簡単なことば理解	2	8.0			2	7.7	1	1.9	5	3.5		4
身近の物の名を理解	1	4.0	1	2.6	4	15.4	2	3.8	8	5.6	1	4
絵本でできた物を指す	7	28.0	8	20.5	1	3.8	5	9.6	21	14.8	4	3
絵本で物の名をいう	9	36.0	15	38.4	6	23.0	10	19.2	40	28.2	4	5
絵本で動作状態をいう	2	8.0	3	7.7	1	3.8	3	5.8	9	6.3		
その場にないものについて会話できる	3	12.0	10	25.7	12	46.2	31	59.6	56	39.4	1	2
計	25		39		26		52		142			

第7表 表出言語と理解言語の関係

理 解 表 出	理 解						
	理解しない	簡単なことば	身近の物の名	絵本でできたものを指す	絵本で物の名をいう	絵本で動作状態をいう	その場にないものについて会話できる
ことばが全くでない	2	3	1	4			
意味をもったことば1つ2つ	1	2	3	12	2		
かなり沢山の単語				1	8		
ことばを2つ重ねて使う			4	4	16	1	1
ことばを3つ以上重ねて使う					8	2	4
助詞を使って文を話す					6	6	12
複雑な文を話す							39

6. 日常の言語活動

子どもが日常生活の中でどのようにことばを使用しているかを、アンケートの回答の中から言語発達の段階別にまとめ第8表に示した。この場合、二項目以上にわたってチェックされたものは、上の方の段階での言語活動が可能であると考え、上の段階へまとめて整理した。例えば、要求をどんな形で表現するかの質問に対して、声や動作で伝える、単語でいう、の二項目にチェックされた場合は、単語でいうの段階にあるとした。したがって、実際の生活よりは、良く評価されている傾向があるはずである。

1) 要求をどんなかたちで表現しているか

子どもが相手に対し自分の要求を伝えるということは、日常生活の中でもっともことばを使いやすい場面と考えられる。第8表(1)にみられるように、約半数は文の形の表現で伝えているが、言語発達の段階からみて、当然ことばの使用ができそうに思われるこどもの中に、なおことばの使用がみられていない場合もある。

2) 他人のすることに関心を示すか

第8表(2)に示したように、他の人のことばに対する関心は、言語発達の段階がすすむにしたがって増している。しかし、他の人のすることに関心がないというものが15名あり、この中には自閉症と診断されているもの5名、課題に対する意識がなく、関心のないことには、みむきもしないなどの行動特徴をもったもの5名がある。

3) 絵本に対して

第8表(3)に示したように、絵本に対する関心は殆どの子どもにみられ、多くの子どもが絵を指しておとなに云わせる、絵の中の物の名をいう段階にあり、絵本を媒介としておとなとの言語交渉をもつことができるが、「ひとりでみる」3名は、母が傍にいくといやがり、本をもって他の所へいってしまう、ひとりごとをいいながらみているなど絵本場面での母親との交渉がもちにくい子どもである。

4) こどもの話すことばはどの程度相手に通じるか

第8表(4)は、子どものことばがどの程度相手に通じるかという質問に対するものである。これについて、誰にでもわかるというものは僅かに11名しかなく、複雑な文を話す段階にあるものの多くが、他人でもある程度わかるの項目に回答したことは、複雑な構文を話しながらもまだ、話し方に稚拙な面が残っていることを示すものであろう。

7. 事後指導の実態

回答者の中で今までに何らかの継続的な治療あるいは指導教育を受けたというものは、幼稚園、保育園への入園を含めて34名であり、これは回答者の21%にすぎない。他は、積極的な指導がなされないまま、あちらこちらのクリニックを訪れたり、家庭での指導にまかされている。受けた指導の内訳は、3~4才になってからの幼稚園、保育園への入園が最も多く14名で、他にろう教育6名、知恵おくれの子どものグループ指導5名、言語治療3名、遊戯療法6名などがある。

このうち、幼稚園、保育園への入園は特に言語遅滞児のための指導ということではできないので、大多数のものは不安をもちながら対策のないまますごしていることになる。これとは別に脳波異常、甲状腺ホルモン低下などで継続的な医療を受けているものが11名ある。

8. 言語発達の予後の良い群悪い群の比較

今まで回答者全員について、その後の言語発達の状態をみてきたが、言語発達について知能発達遅滞、聴力障害、脳障害、自閉症などの問題をもつものはその予後が悪いことは明らかであるので、このような問題を除外して、その他の言語発達を促進あるいは遅滞させる要因をみ出だそうとした。

このため、現在、言語発達が普通以上の段階にあるもの16名と、言語発達がかなり遅れている段階にあるものから、上記の問題をもつものを除外した、DQ80以上のもの17名を選び出し、この両群についてその内容を検討した。対象児は第9表に示した通りである。

1) この両群のDQの平均値は、言語発達の良い群は88.6、言語発達の悪い群は88.7で差はみられない。

2) 第10表にみられるように、言語発達の良い群には現在4才になっているものが多く、3才前後から急に話し始めたというものが5名、幼稚園に行くようになって著しく進歩したというものが3名ある。これに対し発達の悪い群では3才児が多いので、まだ、今後の進歩を期待することができるのではないかと思われる。

3) 第11表に示したように、発達の良い群は、相談来所時から今回の調査までに1年以上経過しているものが多いのに対し、発達の悪い群には6か月未満のものが多い。これは前項に述べた子どもの年齢との関連も考えられる。これらのことから、言語発達のおくれを訴えるケースについては、短時日での発達の好転を期待することはむずかしく、4才児までのフォローアップが必要であると思われる。

4) この両群について、来所時に施行した乳幼児精神発達検査の個々の問題の合格率を算出し比較した。テス

第8表 日常生活の中から

1) 要求をどんなかたちで表現しているか

項目	表出言語発達段階		ことばなし		単語1つ2つ		沢山の単語		二語文		多語文		助詞を使った文		複雑な文		計	
	回数	%	回数	%	回数	%	回数	%	回数	%	回数	%	回数	%	回数	%	回数	%
表情・態度から察してあげる	1	10.0							1	3.8							2	1.4
声や動作で伝える	9	90.0	18	90.0	2	22.2	5	19.2					1	4.2			35	24.6
単語でいう			2	10.0	7	77.8	14	54.0	7	50.0	3	12.5					33	23.2
文でいう							4	15.4	7	50.0	20	83.1	38	97.4	69	48.7		
無記入									2	7.7					1	2.6	3	2.1

2) 他人のすることに関心を示すか

項目	表出言語発達段階		ことばなし		単語1つ2つ		沢山の単語		二語文		多語文		助詞を使った文		複雑な文		計	
	回数	%	回数	%	回数	%	回数	%	回数	%	回数	%	回数	%	回数	%	回数	%
関心がない	3	30.0	4	20.0			2	7.7					4	16.7	2	5.1	15	10.6
動作のまね	6	60.0	13	65.0	7	77.8	11	42.4	3	21.5	2	8.3					42	29.6
ことばのまねをする			3	15.0	1	11.1	8	30.8	7	50.0	8	33.3	8	20.5	35	24.6		
ことばや動作を遊びにとり入れる					1	11.1	3	11.6	4	28.5	10	41.6	23	71.9	46	32.4		
無記入	1	10.0							2	7.7					1	5.1	4	2.8

3) 絵本に対して

項目	表出言語発達段階		ことばなし		単語1つ2つ		沢山の単語		二語文		多語文		助詞を使った文		複雑な文		計	
	回数	%	回数	%	回数	%	回数	%	回数	%	回数	%	回数	%	回数	%	回数	%
ひとりでみる					1	5.0	1	11.1	1	3.9							3	2.1
喜んできく					5	25.0			2	7.7	1	7.2			3	7.7	11	7.7
絵をさしておとなに云わせる	5	50.0	8	40.0	4	44.4	10	38.5	1	7.2	3	12.5	1	2.6	32	22.6		
絵の中のものをいう			3	15.0	4	44.4	12	46.1	9	64.5	15	62.5	14	35.9	57	40.0		
絵を説明する											3	21.5	6	25.0	20	51.3	29	20.5
無記入	5	50.0	3	15.0					1	3.9					1	5.1	9	6.3

4) こどもの話すことばは、どの程度相手に通じるか

項目	表出言語発達段階		ことばなし		単語1つ2つ		沢山の単語		二語文		多語文		助詞を使った文		複雑な文		計	
	回数	%	回数	%	回数	%	回数	%	回数	%	回数	%	回数	%	回数	%	回数	%
家族以外には通じない	5	50.0	12	60.0	6	66.7	10	38.5	3	21.5	3	12.5					39	27.5
他人でもある程度わかる			5	25.0	3	33.3	16	61.8	11	78.5	20	83.1	28	71.9	83	57.5		
誰にでもわかる											1	4.2	10	25.7	11	7.7		
無記入	5	50.0	3	15.0											1	5.1	9	6.3

望 月他：幼児の言語発達に関する研究

第9表 対 象 児

グループ	性	現在年齢	テスト時 年齢	D. Q	発達輪廓 S L M P	ことばの発達に関係あることがら	出生順位	他の発達
言語 発達・良	♂	2:8	2:2	89	○ ○	よくなえていて手がかからず、相手をしなかった2:6頃から急に話しはじめた	2/2	問題なし
	♂	2:11	2:6	115	○ ○ ○ ○		1/2	"
	♂	3:0	1:9	90質		2:6頃から急にしゃべり出した	2/2	"
	♂	3:2	2:11	79		幼稚園にいっようになり急に変わった	2/2	"
	♀	3:6	3:1	101	○ ○ ○	発音をなおそうとするとしゃべらない	2/2	"
	♂	3:9	3:5	84	○		2/2	始歩1:6
	♂	3:11	2:4	100	○ ○ ○	話しかけたり質問すると口をとぎしてしまふ	2/2	問題なし
	♀	4:1	2:2	88	○	分娩時仮死	1/1	"
	♀	4:2	2:5	125	○ ○ ○ ○	三年保育に入れ進歩した。よそへいくと話さない。分娩時仮死	2/2	"
	♀	4:2	2:5	98	○ ○ ○	おとなが多く手をかけすぎた	2/2	始歩1:6脱旧
	♂	4:3	2:7	74	○	3才すぎから急にしゃべりだした。分娩時仮死	1/1	始歩1:7
	♀	4:10	3:2	74		来所後、急によくしゃべるようになった	2/2	問題なし
	♂	4:10	3:6	42		両親と別居、祖母に育てられる	1/1	始歩1:8
	♂	4:11	3:1	69			1/2	問題なし
	♂	4:11	3:6	105B		3:8頃から急に話せるようになった	3/3	"
♂	5:2	3:8	85	○	幼稚園にいっようになり変わった	1/1	"	
言語 発達・悪	♂	2:2	1:11	90	○ ○	分娩時仮死	1/2	問題なし
	♂	2:3	2:0	106	○ ○ ○	分娩時仮死	1/1	"
	♂	2:6	2:1	87	○ ○ ○		1/1	"
	♂	2:10	2:4	108	○ ○ ○		2/3	"
	♂	2:10	2:7	86	○ ○ ○	双生児・早産・未熟児	4/4	"
	♂	3:0	2:6	85	○ ○		1/2	"
	♀	3:0	2:8	84	○ ○ ○		2/2	始歩1:5
	♂	3:0	2:9	82	○ ○		1/1	問題なし
	♂	3:4	2:4	80	○ ○ ○		1/1	"
	♂	3:4	2:5	86	○ ○	あまり相手をしてやれない	2/3	"
	♀	3:4	3:1	97	○	歩行器に入れたまま、相手をしなかった	2/2	おすわりが おくれた
	♂	3:5	2:8	90	○ ○		1/2	問題なし
	♂	3:7	3:4	86		早産・未熟児・分娩時仮死	1/1	"
	♂	3:9	3:0	92	○ ○	おとなが多く過保護	2/2	首のおすわり 0:6
	♀	3:10	2:2	80		未熟児	1/2	おすわり1:0 始歩1:6 始歩1:5
♂	4:4	2:6	85	○ ○		1/1	問題なし	
♀	4:11	3:0	84	○ ○		1/1	始歩1:7	

第10表 年 齢

第11表 調査までの期間

現在年齢	グループ		期 間	グループ		
	言語発達良	言語発達悪		言語発達良	言語発達悪	
2	オ	2	5	～5ヶ月	4	9
3	オ	5	10	6ヶ月～11ヶ月	1	4
4	オ	8	2	1年～1年5ヶ月	4	1
5	オ	1	0	1年半～	7	3

第12表 両群間で差のある検査問題

検査時年齢	グループ	発達輪廓	合格率の差				
			20%	30%	40%	50%	60%
2	オ	言語発達良 L(学習) S(社会性)	108問 位置関係 2/5 106問 眼前にないものの名をいう	105問 分類カード (催促3回)		98問 品物の名をいう	
		言語発達悪 M(材料処理)	110問 積木遊び二方向				
3	オ	言語発達良 S(社会性)		113問 分類カード (無催促)			
		言語発達悪 L(学習) M(材料処理)	110問 積木遊び二方向	115問 20分後の記憶 3/4	107問 20分後の記憶 2/4		117問 円の模写

第13表 発達輪廓の特徴

グループ	言語発達良	言語発達悪
社会性の高いもの	6	0
学習の高いもの	6	14
材料処理の高いもの	5	11
精神的生産の高いもの	6	9

ト不能者2名を除外し、検査時の年齢で分類すると各群の調査数が小さくなり、明瞭な傾向をみだすことは困難であるが、比較的差のみられる項目を第12表に示した。

5) 乳幼児精神発達検査では、運動、社会性、学習、材料処理、精神的生産の各機能別に発達輪廓をとらえることができるようになっている。検査時の発達輪廓の特徴と言語発達の予後との関係をみようとしたのが第13表であり、各領域の発達が生活年齢と比べ良好なもの数を示してある。私達は経験的に発達輪廓の学習、精神的

第14表 出生順位

グループ	言語発達良	言語発達悪
第一子	6	11
一子以外	10	6

第15表 始歩期との関係

グループ	言語発達良	言語発達悪
おくれあり	4	5
おくれなし	12	12

生産の高いものは、学習する能力が高いので言語発達の子後も良いであろうと考えていたが、発達の良い群では言語発達のおくれを訴えながらも社会性の発達が良いものが6名あるのに対し、発達の悪い群には社会性の発達の良いものはなく、差をみせている。これは、テスト施行範囲による差も考えられるが、前項の両群間に差のあるテスト内容と考えあわせてみると言語発達の子後のよい群には言語的な表出はおくれても、課題を理解してそれに応じて行動する能力の存在が考えられる。いいかえれば、理解言語の発達が良く、対人関係の交渉のもち方に問題のないことが、その後の言語発達に好影響を及ぼしているものであろう。

これに対し、発達の悪い群には、学習、材料処理、精

神的生産の領域の発達の良いものが多くなっている。

6) また、第14表に示したように発達の良い群には第二子あるいは三子が多く、発達の悪い群には第一子が多い。一般に長子に比べ二、三子は言語の発達がおくれる傾向のあることが報告されているが、初期の言語発達におくれをみせても、その後回復をみて発達が好転する例は第二、三子に多いようである。

7) 言語以外の発達のおくれの有無が、言語発達の子後判定する指標にはならないだろうかと考え、カルテより始歩期など発達に関連ある項目を拾い出してみたが第15表に示したように特定の傾向をみることはできなかった。

IV 要 約

言語発達の遅滞を主訴とする2～3才児について子後調査を行い、言語の発達状況について調べた。回答数は142名である。

1. 言語の発達状況は、一般に思わしくなく、現在もなお発達におくれが認められるものが大多数であり、母親がみた言語発達状況は、現在おくれがあるというもの126名(80%)を占めている。

2. 言語発達の状況とDQの間にはかなり関係がみられる。概して知能遅滞の明らかなものは言語発達の子後が悪いが例外もあり必ずしもDQが言語発達の子後を知る手がかりとはならない。

3. 聴力障害・脳障害・自閉症などの問題の存在する子どもの言語発達は著しく障害されている場合が多い。

4. 言語発達遅滞児についての指導は、極めて貧しくわずか20名(14%)が継続的指導を受けているにすぎず、残りの大部分が対策のないまま家庭での指導にまかされている。

5. 現在言語発達がふつう以上になっているものと、発達がかなり遅れている段階の子どもを比較すると、1) 言語発達の好転している群には、現在4才に達しているもの、相談来所後1年以上経過しているものが多く言語発達遅滞児については長期のフォローアップの必要性が認められる。2) 言語発達と乳幼児精神発達検査の発達輪廓との関係を見ると言語発達の好転している群には、社会性の領域の発達の良いものが多い。3) 言語発達の好転している群には、第二子・三子が多い。

Study on the Development of Speech and Language of Children —Investigation into Prognosis of Speech Delayed Children—

Dept. 5 Takeko Mochizuki
Akiko Maruo

We examined the prognosis of the speech development of children aged 2 to 3 years old, who had been brought to the Institute for the problem of delayed speech, and investigated the later status of the speech development of 142 children whose mothers sent us their answers.

The findings are:

1. Most of the children still show delay in their speech development. The mothers of 126 children (80%) report themselves that the speeches of their children are slow in progress.

2. A considerable relation is seen between speech developmental status and D. Q., Though the prognosis of speech development of children with obvious mental retardation is generally bad, there are some exceptions, and D. Q. is not always considered the clue to the prognosis of speech development.

3. Speech development is remarkably disordered in many of the children who suffer hearing impairment, brain injury and who are autistic.

4. Proper guidance is lacking for the speech delayed children. Only 20 children (14%) are receiving follow-up guidance. The rest are mostly left under the guidance of their families without any counter-plan.

5. Comparing the children whose speeches have improved above the normal level with the children whose speeches are much delayed at present;

1) In the former group, many children have reached the age of 4 years, and more than one year has elapsed since they were brought to the Institute. We find it quite necessary to make a long follow-up guidance for the speech delayed children.

2) Studying the relation between speech development and developmental profile by Infants' Mental Development Test, many children in the improved speech group are showing better social development.

3) It was found that many children in the improved speech group were the second or the third child in the family.